

人の一生は重き荷を負ふて遠き道を行くが如し急ぐ可らず

度六を最低とし、其差全國に於て十三度餘を示し之を前月比すれば概して均等なるも最高氣温は上旬に起り最低氣温は各地未だ月に現はれ龍興浦に於ける點下十八度七は二十年來未曾有の最低なり降水は南岸及東岸に多し中部及西岸に少く快晴日數は北部に多く何れも十日内外にして龍興浦の十四日を最多とし中部以南に少く木浦の二日を最少とし降雪は中部西南部及北東部に多く十日以上にて城津の十八日を最多とし釜山の一日を最少とし華風は釜山に十三日城津に四日過少なり外他は一日乃至二日の過多なり又結

に依れば日韓人競ふて出品するの有機體にて既に事務所に出品申込を爲したるもの少なからざる由れば此趨勢を以てする時は出品點數は漸く期限迄には既に豫期以上に達するべく會々開會に至らば極めて非常の盛況を呈すべし殊に今回ハ統監府特許局より産業に關する有益なる精良の特許機械其他特許品を陳列し機械は開會中毎日運轉して公衆の觀覽に供する由なれば會場の一異彩は此に於て公衆の歡迎を觀すべく地方人民は此機を逸せず必ず觀覽して工業上の智識に資するを要す又物產

第五十四席 昌井二講演

長「何う致しまして、ね茶でも上
又「昨日人參つしやい」其の儘別
歸つた、此の評判が高くなつて、長
さんは剛膽だ、三房さんは剛いど云
と評判、又小嬢は是れを江戸の土産
で故郷京へ歸りましたが、京都で
江戸には豪い人間がある、新場の小
と云ひ、長吉と云ひ大したものだ
は三房と云ふ男が今に京都に來たら
程待遇なけりやアならんと言つて、
鐵に錠めて非常に賞賛したと云ふ、
い成會様の小嬢は三十歳の折、即ち
治二十年を待たずして、冥土黄泉の

小娘の本語は是れにて終りに致しき
 是れより又元へ返つて喜左衛門村正
 の話に移ります
 喜左衛門村正、其の後故心をして、
 縁の多士と教養を含みながら、
 縁の多士に陰陽を調へ、心を籠めて、
 下し鍛へた、然るに伊勢の津で、
 其の娘を買ひ受けまして、夫婦の別、
 一子を儲け、是れを太郎と號け、
 に従ひまして真に能く嚴治の道を、
 に數はつて居る、十五歳のとき、
 病を患ひ臥しました、一生懸命で、
 母も臨に看護をして居る、然るに
 左衛門はもう實業の効もなく、
 用

伊の 木を、 向に 長を 心な 父が 置候 此の 太師父の遺言を守つて此の御

上へのお言を心に徹し、肝に銘じ、
 に於て能く其仰せを守るのでござるやう
 共、今一度は御金快にならうましてして
 修業を御勤め下さるやう」と言つて
 う、此が、今生の別れと見なしまして、
 ウ、其の夜退潮と露共に返らぬ旅
 きました、太郎は泣くく「野邊の
 も事済みまして、四十九日や百々々
 其の忌服の掛つて居るあひだは、
 にも付きません、夫れから三年目
 にも失なひ、年十八にして此の御

賢めて修業せよ、頭を垂れて太郎

「御教訓誠に懸りたいのでござるやう


て、母に送るに
母に送るに
母に送るに

たが私に然れど
たが私に然れど
たが私に然れど

父に本
父に本
父に本

タカチ

胃腸新



熱心聖志多年爲斯
 醫術精良百忱然似
 臨泰而輕重也
 京師本町五丁目
 易敷觀
 相敷觀
 館主 土御門派大

支友會
部教授
龍山本町二丁目廿三番

東司照

<p>藥</p> <p>バスミ</p>	<p>館</p>	<p>座於 待者 意匪</p>	<p>子</p>	<p>製繩機</p>
	<p>京城明治</p>	<p>特許辯理士</p>	<p>辯護士</p>	<p>……</p>

振替東京七六五番電下五九三
町二丁目(佛國教會前)
岩田仙堂
電話三五四一
韓國總代理店
仁川本町二丁目電話八五〇〇
竹田津三

平	不	雷
---	---	---

★株式會社 百三十銀行 總店
 東京本町二丁目十五番地
 電話五十八番
 資本金五百萬圓
 預取 安田善三郎
 爲替取組先